ねいの里 ホォホォニュース

撮影：丸山功氏

ロシアからのお客さま

ねいの里では、ロシア沿海地方と渡り鳥の共同調査を通し、富山県ジュニアナチュラリストとロシアエコクラブの交流事業を行っています。2006 年も春秋の渡り鳥の移動時期に、約 4700 羽 50 種の鳥類にリングをつけ放鳥しました。

はるか北の大地から大移動を繰り返し命のリレーを続けています。ロシアと日本を繁殖・越冬地として行き来する鳥類は、少なくとも 110 余種。どちらの環境の変化も、この命の存続に関わっているのです。この秋、シベリア地方から渡ってきた「ジョウビタキ」が職員の車のサイドミラーとにらみあい、フンをかける姿を 11 月末から 12 月毎日のように目にしました。縄張り意識が強い鳥なので、鏡に映る侵入者を追い払おうとしているのです。ヘクソカズラやムラサキシキブの実を食べているようです。職員が撮影した写真から、10/29 婦中の調査地でリングをつけた鳥であることが判明。もしかすると毎年この地を訪れているのかもしれません。ロシアからの訪問者もねいの里の豊かな自然を必要としているのです。

言葉は交わす事ができませんが、たくましく生きる鳥から多くのメッセージが私たちに届けられています。

吉住窯のひとり言　連載 - 1

Ｉ．　僕の名は『吉住窯』

平成１５年７月１９日に厳粛な入魂、火入れ式の神事及び命名の儀が執り行なわれ、湯浅館長がつけてくれた『吉住窯』の名で僕が誕生しました。僕は多くのボランティアの方々と職員の皆さんの知恵と汗と努力で築き上げられ、さらに僕の近くで切り出されたコナラの大木で立派な上屋が建てられ、雨風から守ってくれました。

火入れ式からが僕の最初の仕事の始まりで、窯には炭の材料になるコナラが約１６０本詰め込まれておりました。　火入れから２０時間余り燃料が焚き続けられ、三日間で僕の仕事は終了しました。

第一回の初仕事から３年間余りで１１回の炭焼きをこなしました。多くの僕の仲間の中には、窯の天井に不具合が出たり、窯の側面や底からの漏水で危険に遭遇した者が有ったとか聞いておりますが、幸いにも僕を作ってくれたおじさん達は事前対策をしっかりしてくれたので、今も健全に仕事を行っております。

炭の出来上がりは、不慣れな僕にとってはまずまずの出来ばえのようです。　僕に携わってくれているおじさん達は、炭焼きの良否は毎回が試験焼きの様なもので、僕の働きには大変苦労しておられるようです。

これからも良質の炭が出せるように炭焼き技術の向上に努めますので、ご声援をお願い致します。

（次号以降は、僕から作り出される炭や木酢液などについてお話いたします）

活動ふりかえり

塾の会活動日（平成 18 年 11 月 4 日）

水生庭苑周辺で繁茂している外来植物のセイタカアワダチソウとアメリカセンダングサの除去をしました。来年出てこないように根っこから引き抜き、休憩舎のまわりがすっきりとしました。午後からねいの里の木の実しらべで、いろいろな木の実を観察しました。どんぐりが豊富でニホンリスもいました。（山口由紀子）

第４回生き物セミナーとビオトープ作り　講師　間宮寿頼氏　（平成 18 年 11 月 19 日）

「野生動物とのつきあい方」をテーマに、ここ３年間の富山県のクマの出没と被害の状況、今年は特に平野部に接近している実情、出没させない出会わない方法等の講話を聴き、改めて共存の難しさを感じました。その後炭出し行事と、暖かい鮭汁をいただきました。(菅野紀子)

キノコ作りにトライ！（平成 18 年 12 月 3 日）

ねいの里の間伐材をほだ木として、ジャンボシイタケの菌を打ちました。参加者 32 名で家族連れが多く、木づちを上手に使い子供たちもしっかりお手伝い。おいしいシイタケを、炭であぶっていただくのが待ち遠しいですね。（森洋子）

里っこ山っこ にっこにこ

ねいの里の自然に親しみ、年間を通じて活動する塾の会などの方々を紹介するコーナー

「富山森のプレイグループ」

園舎を持たず自然の中で日常的にすごす「森のようちえん」を理念に、0～6 才の親子（現在 11 家族）で活動している野外自主保育の会です。四季を通じて天候にかかわらず毎週金曜日 9 時 30 分ねいの里に集合し、森のおさんぽにでかけます。まずはひなたぼっこ広場の丸太で円く囲んだサークルでわらべ歌遊びをしておやつをいただきます。この後、炭焼き小屋へ行って火をおこし、竹筒バームクーヘンなど毎回アイデアと野趣あふれる豪快な焚き火料理をします。

こどもたちも湧き水を汲んできたり、野菜を包丁で刻んだり、生地をこねたりと喜んで参加。七夕やお月見、クリスマスなど季節の行事も森の中で素朴に美しくお祝いしています。

森の鳥たちのさえずりや木々の葉ずれの音、さわやかな風、冷たい雨、焚き火の暖かさといった原体験が、子どもたちの深いところで記憶され、大切な一生の宝物になるのだと思います。

（代表　藤井徳子）

森のプレイグループのブログ　http://waldkindergarten.wablog.com/（新年度会員募集）

自 然 塾 の 会

（ねいの里ホームページで活動紹介しています。）

毎月第１土曜日が活動日です。

参加予約はいりません。お気軽にねいの里へお越しください！

（都合のよい時間だけの部分参加も歓迎です。）

昼食は各自ご持参ください、炭焼き小屋の囲炉裏をかこんでいただきましょう。

2月3日（土）		3月3日（土）
○　午前 10 時～12 時 「木の実でつくる ねいの里のなかまたち」		○　午前 10 時～12 時 自然塾の会総会
○　午後　総会・写真展打合せ		○　午後　フィールド観察

■「自然塾の会写真展」（とき：2 月 15 日～3 月 29 日　ところ：ねいの里展示館）
自然塾の会員さんの自然をテーマとした写真(4 ツ切ワイド)を募集します。
ねいの里事務所へ作品を搬入お待ちしています(1 人 2 点、2/11 まで)。

■　3 月 3 日自然塾の会総会では次年度の活動や事務局について話合いたいと思います。
皆さんの意見をお聞かせください。

≪　体験レポート　≫

11 月 25 日に火入れが行われた炭焼きに参加しました。原木入れ、窯の封鎖点火から温度調整と、炭焼きの工程を丸山さん山本さんに教えて頂きました。今回の参加で炭焼きの難しさを知りました。次回は是非泊まりで参加したいと思います。「炭の取出し」が楽しみです。（長谷川覚）

11/19 原木入れ

ねいの里行事案内

お電話でお申込みください。
詳細は HP で紹介しています。

3 月 17 日（土）
9:30～13:00【ねいの里】

自然観察会「早春の動植物をたずねる」

まだ寒さが残る季節ですが、よく観察するとさまざまな生き物たちが活動をはじめています。ホクリクサンショウウオやヤマアカガエル、マンサクなど春をみつけにでかけましょう。

発行　生き物ふれあい自然塾　塾長 湯浅純孝

〒939－2632　富山県富山市婦中町吉住 1－1 自然博物園ねいの里内
Tel　076-469-5252 ／メールアドレス　shizen@toyamap.or.jp
ホームページ　http://www.toyamap.or.jp/shizen/

ふくろう通信

第３号
2007 年 1 月 10 日
生き物ふれあい自然塾

ふくろう先生にきいてみよう

今日のふくろう先生
林　梅夫　先生（初代館長）

「ねいの里」回想

昭和 40 年代に入ると、経済的にも時間的にもゆとりが生じ、文化的志向が始まる。この頃から、児童の生活体験の中に、家事の手伝いや屋外での遊びが少なくなり、学力向上中心社会へと変貌した。

一方、農村の自然環境も変化し、水田の基盤整備事業と共に県の河川整備計画に基づき用排水路等の改修工事が始まる。三方コンクリート・U 字溝で水辺の生態系が損なわれた。当時の河川の中には、ビニール、金属、ガラス、時にはバキュームカーが放した人糞尿等が流れるという状態のものもあった。そうした中、農村の労働力が都市に流れ、春夏に行われていた「えざらい（江浚）」が縮小され、河川の環境悪化が手に負えなくなった。川のメダカ、カエル、ホタル、トンボ、ドジョウやタニシ等の水辺の生態系を憂える人たちの声は一蹴され、米の生産が最優先されていった。

そのような時代の流れの中で、当時の中田知事は、自然保護や自然の生態系の重要性を県民に教育する必要性を強く提唱されたと聞いている。これを受けて昭和 53 年頃から、県自然保護課の埴生雅章技師（現土木部長）や湯浅純孝主任（現館長）を中心に数人のプロジェクトを組織し、理念と構想が練られた。昭和 56 年、県自然博物園センターが設立され、愛称「ねいの里」も県民の応募で決まり、中沖前知事により 6 月開園の式をあげた。

「ねいの里」の理念は、「親しもう・学ぼう・考えよう」の 3 本柱で、生物の生き様が学習の素材。園内は多種多様な生物の生態が見られ、春夏秋冬その目的達成の素材は十分。しかし、２年３年と経過するうちに、ノウサギ、野鳥、昆虫の個体数も減少し、園外に素材を求めなければならなくなった。変貌する世相の中で、近年は生き物とのふれあいの場や希少動植物の保全・誘致を図るためのビオトープ事業を県内初に取り入れられるなど、館長を始め職員、協力者のご苦労に敬意と感謝を捧げるこの頃である。